

日本大学工科校友会

桜工

1972—**53**



日本大学校歌

相馬御風 作詞
山田研作 作曲

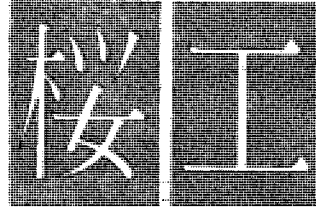


1. 日に日に新たに 文化の華の さかゆく世界
世界の曠野の上に 朝日と輝く 国の名負ひて
巍然と立ちたる 大学日本 正義と自由の旗標の下に
集まる学徒の 使命は重し いざ 讃へん 大学日本
いざ 歌はん われらが理想
2. 四海に先んじ 日いつる国に 富嶽とゆるがぬ
建学の基礎 栄ある歴史の道一すじに 向上息まざる
大学日本 治世の一念ほのほと燃ゆる われらが行く手の
光を見よや いざ 讃へん 大学日本 いざ 歌はん
われらが理想

若きエンジニア

堀内敬三 作詞作曲

1. 昭喚の日出づる国こそわが祖国
其の名をば担いて聳ゆわが母校
伸びゆく日本の力は茲に
地を拓き行く者若きエンジニア
2. 青春に夢あり宇宙に真理あり
現実と理想を結ぶもの我等
科学の力と不屈の意志を
武器として進まん若きエンジニア



日本大学
工科校友会誌
1972
VoL. 20
No. 53

●創立50周年に当たって…木村理工学部長挨拶… 3

公害雑話……………小山一二… 5
無公害自動車の夢……………景山克三… 7

理工学部留志野図書館……………小林美夫…10
建設中の9号館……………宮川英二…11

海外研修旅行随想記……………神谷正信…13
ヨーロッパ研修旅行……………池森亀鶴…16
連珠閑談……………黒柳悠々…20

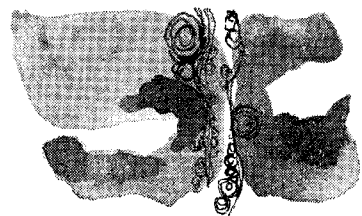
☆部会だより

土 木……………22
建 築……………23
機 械……………24
薬 学……………25
交 通……………26
精 密……………27
数 学……………28
物 理……………29

☆支部だより……………30

☆本会記事……………33

☆編集後記……………34



創立 50 周年に 当 っ て

—木村理工学部長挨拶要旨—

さる11月23日午後4時から、新宿京王プラザホテル5階コンコールドルームにおいて、日本大学理工学部創立50年記念式が開催されました。参列者は創立以来の老先生を始め、鈴木総長以下大学関係者、および第1回以来の校友で800名に垂々とし誠に盛会であった。式は理工学部長 木村秀政先生の挨拶に始まり、総長 鈴木勝先生および工科校友会長 柴田 衛氏の祝辞をもって終了。会場を隣接の宴会場に移し、大山松治郎先生の音頭のもとに乾杯、50年の歴史を語りあい午後8時半すぎに散会した。

(この挨拶は当日の録音を編集委員会で要約したものです。)

本日、ここに理工学部の50年記念式典を催しましたところ、多年本学部に関係のある方々、また深い理解をもって下さっている皆様多数お集りをいただき予想以上の盛会になり、感謝にたえない次第でございます。

理工学部が50年の歴史を持って、ここまで発展してきた経過を顧みますと、この学部をここまで育ててきたものは広義では日本の社会であり、直接には大学当局という機関であります。ここで皆様方のお顔を拝見し、結局は理工学部にいるのかたちで関係してきたすべての人々、つまり皆様1人1人であるという実感強くする次第であります。

理工学部の歴史については、ご承知のことと存じますが、前身である高等工学校が、今の大学本部のある三崎町に創設されたのは大正9年(1920年)で、土木・建築の2学科で授業がはじめられ、正確には今年で51年前のことです。その翌年(大正10年)に現在の歯学部病院のある位置に木造3階建の校舎ができ本格的にスタートいたしました。

50年とひとくちに申しますが、いわば半世紀の大変長い期間で、何しろ私が中学の上級生であった時ですから、お集りの皆様方の中にはまだ生れていなかった方も多数おられることと思えます。したがって50年前の社会情勢といえどもピンとこないかもしれませんが、例を、最近非常に普及し、われわれの生活に密接な関係を持つようになった、自動車にとって、その間の変わり方を申しあげますと、現在ではその数全国で1,800万台、東京だけでも200万台あり

ますが、大正9年には、全国で1万台でありました。つまり現在の1800分の1しかなかったのです。したがって、自動車事故などはあるわけがないし、自動車自体が珍しかったのです。

こんなわけで、当時の日本は技術的には世界の後進国で、外国技術の導入、消化につとめておったのです。

第一次世界大戦の結果、科学技術の必要性が日本でも叫ばれておりましたが、まだまだ関心が非常に薄く、当時私立大学で工学部を持っていたのは早稲田だけだったのです。その早稲田に続き日大が卒先して工科を作ったのです。それだけに、当時の日本大学のかたがたの高等工学校に対する気の入れ方、意気込みは大へんなもので、大正12年9月の関東大震災で全焼した校舎を直ちにバラックで建て直し、11月にはもう授業を再開したとのことでした。

当時、私は、国立の高等学校におったのですが、完全に2学期間休み翌年になってからようやく授業が再開された状態でした。この点からも当時の日本大学のかたがたの意気込みがうかがわれると思えます。

また、実験設備でも、当時日本で全く珍しかった、スウェーデン製のアムスラーの試験機をすでに輸入しており、非常な力の入れかたで工学部が創設されたわけです。

その後、昭和3年に旧制の工学部が創設され、当初は土木・建築・機械および電気の4科でスタートしたのです。当時の学部長は佐野先生、学監に円谷先生・笠原先生、主任の諸先生が、山口先生(土木)笠原先生(建築)竹村先



新設された校友談話室

《編集後記》

このところ低迷しているわが国経済は国際通貨不安に端を発した所謂ドルショックという異常事態に直面し、かつてない混乱とある程度長期的な不況の様相を呈して来たようであります。これが対策として民間投資の落ち込みをおぎなうべく公共投資の繰り上げ発注や予算規模の拡大も一向に景気の回復の助けとならない世相であります。今後の見通しといたしましては注目される円切上げの問題やその他の理由で生産調整等当面する問題は多く景気の先き行きになお暗いものが感ぜられます。このような世相にありましてもわが理工学部は、過日盛会裡に創立50年記念式典をすまし、益々繁栄の一途をたどりつつありますことは、7万数千を数える校友諸兄が全国的に官民をとわず日大精神を発揮し、自己の職場を守り、同窓生の団結と相互親

愛の深さの結果であり御同慶の至りであります。

一時全国的なものとなった悪夢のような学園紛争もおさまり、中断されていたわが「桜工」も前号に引き続きまして諸先生や諸兄をわずらわし原稿をお願いしてこのたび第53号を発行することが出来ました。編集に当たった私どもとしては限られた予算内でのことでもあり、決して御満足いただけるものではなかったことと存じますが、前述のような世相にあって、我々がいよいよ建学の精神にのっとり、世の為人の為に活躍される校友相互の親睦を主目的とする校友会の発展に幾分なりとも寄与したいと念じて居ります。

本号では、さらに伸びゆく母校理工学部の模様を、新装なった習志野の図書館と建築中の9号館で皆様にお紹介いたしました。

御投稿下さいました諸先生、諸兄に対しまして厚く御礼申し上げます

とともに、発行に全面的にお骨折り頂きました校友会事務局に対しまして深く感謝申し上げます。なお、次号も年度内に発刊いたし度企画致し居りますので、一部の学科にかたよらないよう各科からの御投稿と支部だよりをお願い申し上げます。

■会誌委員／委員長中山隆（土木）／土木・下青木秀吉、木村吉己／建築・丸田操、広瀬力／機械・向角豊志、黒瀬元雄／電気・高橋信夫、館和夫／化学・黒沢喜久雄、伊藤和雄／薬学・山内盛

■昭和47年1月20日印刷／30日発行

■編集兼発行人／高木政司

■発行／日本大学工科校友会（東京都千代田区神田駿河台1の8／電話東京293—3251内線206／振替・東京162710）

■印刷／鉄鋼新聞社神保町工場